

月の花挽歌 ～4.私鉄沿線～

4-5

潮時だと思った昌幸はコップ酒を飲み干すと、「女将さん、おあいそ」と頼んだ。

「ご馳走さま。後はよろしく」と昌幸は釣銭を受け取らないで、「それじゃまた」と山川の肩を叩いて出口に向かう。「クイーンニ、ヨロシク」と背後で声をかける山川に「お互い、いくつになっても棋風は変わらん！」と格子戸に手をかけて振り向いた昌幸は、親しみを込めて言った。

昌幸は小料理屋を出ると、タクシーを拾おうと思ったが、無性に池上線が恋しくて、酩酊加減を春寒にゆだね、真紀に携帯電話をかけた。

「これから電車に乗るので、遅くても10時までには帰えるから」と真紀に伝えた。

「お酒が入っているの？」と声の調子から察した真紀が尋ねた。

「一局指した後に、珍しく誘われたので、軽くのもりが飲みすぎたようだ」

「五反田まで迎えに行きましょうか？」

「ありがとう。そんなに酔ってないから大丈夫だよ」

「わかったわ。じゃ、気をつけて帰ってきてね」と真紀が(きてね)を言い終わらないうちに、「店を開けておいてくれないか？」と遮るので、「え？」と聞き返す真紀に、「休みなのに悪いね。今夜は貸しきりで飲みたいんだ」と昌幸は無理押しをした。

その時昌幸はボビー・フィッシャーが死んだ二ヶ月後に、奇しくも自分が死のうとは夢にも思っていなかった。

肝臓がだいぶ弱っていることは常々忠告されていたが、医者嫌いな昌幸は、血液検査の数値や超音波検査の画像を横目で見ながら、気休め程度に酒量を減らすことで善しとしていた。周りから少し痩せたと気遣われても、適当な返答をしてやり過ぎしたが、さすがに真紀にそう言われた時は、予兆もなく、みぞおちのあたりに、突然激痛を感じることも含めて、吐露してしまおうかと喉まで出かかった言葉をのみ込んだこともあった。

その上に、メインバンクと顧問税理士以外は、妻や妹にすら知られていなかったが、傘下の味噌メーカーの業績不振により、本体の屋台骨が揺らいでいたことも追い打ちをかけていた。

背伸びをして高級クラブ『こはる』へ通う余裕などなかったが、男はドツポにはまり込めばはまり込むほど、素振りすら見せないで女に傾倒していった。